

看護課程志望高校生の看護職に対するイメージに関する研究

前田真紀子 高畑晴美 近藤益子 太田武夫 喜多嶋康一

要 約

本研究では、看護課程志望の高校生が看護職に対してどのようなイメージを持っているのか、看護教育機関の希望や将来の看護職種の希望は看護職に対するイメージと関係があるのかを明らかにしたいと考えた。岡山県下の全ての高校に在学中の看護課程志望高校生に対して、質問紙調査をおこなった。222名から回答が得られ、分析を行った結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 看護課程志望高校生は看護職に対して非常に良いイメージを持っており、同時に労働条件の厳しさも理解していた。その良いイメージとは、看護職の持つ尊さや献身性に由来する自負心と、資格のもつ現実的利点であった。しかし、看護職の専門性を表す、高度な知識・判断・技術、生涯教育の必要性の認識は低かった。
- 2) 短大・大学を志望する高校生は、看護学校・准看護学校志望者に比べ、看護職は生涯教育を必要とするとイメージしていた。
- 3) 看護婦、保健婦、助産婦のどの職種を希望するかによって、看護職に対するイメージに違いがあった。

キーワード：看護職に対するイメージ、高校生、看護課程、看護職種

はじめに

看護労働は、白衣の天使・聖職という美名のもとに、育児や家事と同等の伝統的女性役割として扱われ、無償の行為とされてしまったために、社会的評価が低いという歴史的背景がある¹⁾。また、その従属的・女性的職業という一般的なイメージは、今なお看護婦の自律的な意志決定の自由を制限していると指摘されている²⁾。一方、職業選択の初期段階である職業興味の形成期においては、看護婦に対するイメージが看護職の選択に影響する³⁾と言われており、この一般的・伝統的なイメージは高校生の看護婦に対するイメージ形成、ひいては看護職の選択にも影響を及ぼしていると考えられる。

看護職の選択に当たって、高校生は基本的に自分自身の意志を尊重して進路決定を行っているこ

とは既に指摘されている⁴⁾。看護の将来問題として、看護を志す質の高い人材を確保することの重要性が強調されている今日^{5)~7)}、高校生が看護職に対して全般的に良いイメージを持つことによって、看護課程を自分の進路として選択できるよう働きかけることが必要になると考えられる。そこで、まず看護課程を志望する高校生が、現在看護職に対してどのようなイメージをもっているかを知る必要があると考えた。

また現在4年制大学が増え、看護職教育機関がより多様になり、高校生の教育機関の選択の幅が広がっている。そこで、高校生が看護職に対してどのようなイメージを持つかによって、教育機関の選択や将来なりたいと希望する看護職種が決定されるのではないかと考えられる。

本研究では、看護課程志望高校生は看護婦に対

してどのようなイメージを持っているのか、看護婦に対するイメージは、希望する看護職教育機関や将来なりたいと希望する看護職種と関連があるのかを明らかにしたいと考えた。

研究 方 法

1. 対象：岡山県下の全ての公私立高校計76校に在学中の生徒のうち、調査時に看護課程の進学を希望している高校生を対象とした。

2. 調査方法：調査は1993年11月に、無記名質問紙によって行った。質問内容は、1) 所属, 2) 将来希望する看護職種, 3) 将来就職を希望する地域と職場, 4) 希望する看護職教育機関及び最も希望する教育機関, 5) 看護職に対するイメージで構成した。手続きは以下のように行った。県下の公私立高校76校の進路指導担当教諭に対して、質問紙を各10枚ずつ郵送し、看護課程への進学を希望している生徒に、調査の主旨を説明し協力してもらえるように依頼した。同意の得られた生徒には質問紙に回答してもらい、各校より返送してもらった。

3. 分析方法：回収された質問紙は、統計パッケージ HALBAU (現代数学社) を用いて分析した。比率の比較はカイ 2 乗検定によって行い、頻度が10以下である場合は直接確率計算法を採用した。

結 果

応答高校数は34校 (44.7%)、回答者数は222名であった。

1. 所属：学科は普通科178名 (80.2%)、その他42名 (18.9%) で、その他には衛生看護科の生徒10名が含まれていた。学年は3年生188名 (84.7%)、2年生17名 (7.7%)、1年生3名 (1.4%) であった。回答者は普通科高校3年生が多数を占めていた。

2. 将来希望する看護職種：種々の看護職種のうち、何になりたいかという質問についての回答は複数回答で調べた。結果は表1に示した通りである。高校生は看護婦を最も多く希望しているが、保健婦、助産婦を希望するものも多かった。

3. 将来就職を希望する地域と職場：希望する地

表1 将来の看護職の希望

看護職種	希望人数(%)
看護婦	162 (73.0%)
保健婦	33 (14.9%)
助産婦	20 (9.0%)
養護教諭	5 (2.6%)
看護教育者	5 (2.6%)
研究者	4 (1.8%)
その他	20 (9.0%)

域は単一回答、希望する職場は複数回答で調べた。結果は表2, 3に示した通りである。希望する地域は地元・県内がほぼ65%であった。希望する職場は、病院・医院などの医療施設が多かった。しかし福祉施設も約15%と比較的多く、訪問看護施設や教育機関、一般学校などを選択したものもいた。

表2 将来働きたい地域

地 域	希望人数(%)
地 元	32 (14.4%)
県 内	114 (51.4%)
中国地方	11 (5.0%)
国 内	34 (15.3%)
国 外	9 (4.0%)
そ の 他	10 (4.5%)
N A	12 (5.4%)

表3 働きたい施設

職 場	希望人数(%)
病 院	183 (82.4%)
医院・診療所	44 (19.8%)
官 公 庁	10 (4.5%)
企業・工場	11 (5.0%)
福祉施設	34 (15.3%)
一般学校	11 (5.0%)
看護教育機関	13 (5.9%)
訪問看護施設	20 (9.0%)
そ の 他	0 (0%)

4. 看護職教育機関進学の希望：入学を最も希望する教育機関は単一回答、受験を希望する教育機関は複数回答で調査した。結果は表4, 5に示した。入学を最も希望する教育機関は看護学校、短

大看護学科、大学看護学科ともに大差はなく、半数の生徒は大学又は短大を希望していた。受験予定校は看護学校が最も多かったが、大学・短大受験を希望しているものも多くいた。大学進学希望者は70%以上が併願を希望しており、短大との併願（大学・短大の2併願、大学・短大・看護学校の3併願）が多かった。大学のみ単願するものも約20%いた。短大希望者の約35%以上は短大の単願を希望し、看護学校希望者の75%は看護学校の

表4 教育機関の進路希望と受験予定（受験予定は複数回答可）

教育機関	最も希望(%)	受験予定(%)
大学看護学科	53 (23.7%)	65 (29.3%)
短期大学看護学科	55 (24.8%)	94 (42.3%)
看護学校	68 (30.6%)	124 (55.9%)
准看護学校	14 (6.3%)	28 (12.6%)
その他	17 (7.6%)	19 (8.6%)
N	A	15 (6.8%)

表5 第一希望教育機関別受験予定状況

		第一希望の教育機関			
		大学 (%)	短大 (%)	看護学校 (%)	准看護学校 (%)
単願	大学	10 (18.9%)	0	0	0
	短大	2 (3.8%)	20 (36.4%)	0	0
	看護学校	1 (1.9%)	1 (1.8%)	51 (75.0%)	0
	准看護学校	0	1 (1.8%)	3 (4.4%)	13 (92.9%)
	計	13 (24.5%)	22 (40.0%)	54 (79.4%)	13 (92.9%)
併願	大・短	15 (28.3%)	4 (7.3%)	0	0
	大・看	5 (9.4%)	0	3 (4.4%)	0
	大・准	0	0	0	0
	短・看	0	21 (38.2%)	3 (4.4%)	0
	短・准	1 (1.8%)	0	0	0
	看・准	0	0	6 (8.8%)	1 (7.1%)
	大・短・看	18 (34.0%)	6 (10.9%)	1 (1.5%)	0
	その他	1 (1.9%)	1 (1.8%)	0	0
計	40 (75.5%)	32 (58.2%)	13 (19.1%)	1 (7.1%)	
N	A	0 (0%)	1 (1.8%)	1 (1.5%)	0 (0%)
合計		53 (100%)	55 (100%)	68 (100%)	14 (100%)

注

大：4年制大学看護学科

短：短期大学看護学科

看：看護学校

准：准看護学校

単願を希望していた。少ないながら准看護学校を第1希望とするものが6%いた。

5. 看護職に対するイメージ：看護職に対するイメージ調査は、33個のイメージ項目から該当する項目を選択させ、複数回答可とした。結果は図1に示した通りである。今回対象となった看護課程を志望する高校生は、看護婦に対して、78.4%の「人の役に立つ」、以下「誇りを持てる」、「一生続けられる」といった良いイメージを高率に持っていた。一方、「肉体労働」、「時間的に厳しい」といった項目も高率で、現実を冷静にとらえていることも分かる。しかし、「汚い」、「ストレスが強

い」、「危険」などのネガティブなイメージは比較的下位であった。看護職の専門性を示す「高度な知識」、「高度な判断」は約30%で、「親は賛成」、「資格が役立つ」ほど高くなかった。また社会的評価を「低い」とイメージした者は約10%、「高い」とイメージした者は約20%といずれも低率であった。

6. 看護職教育機関別の看護職に対するイメージ：入学を最も希望する教育機関のうち、看護学校または准看護学校を希望する者（以下、看護・准看護学校群という）82名、短期大学看護学科を希望する者（以下、短大群という）55名、4年制大学看

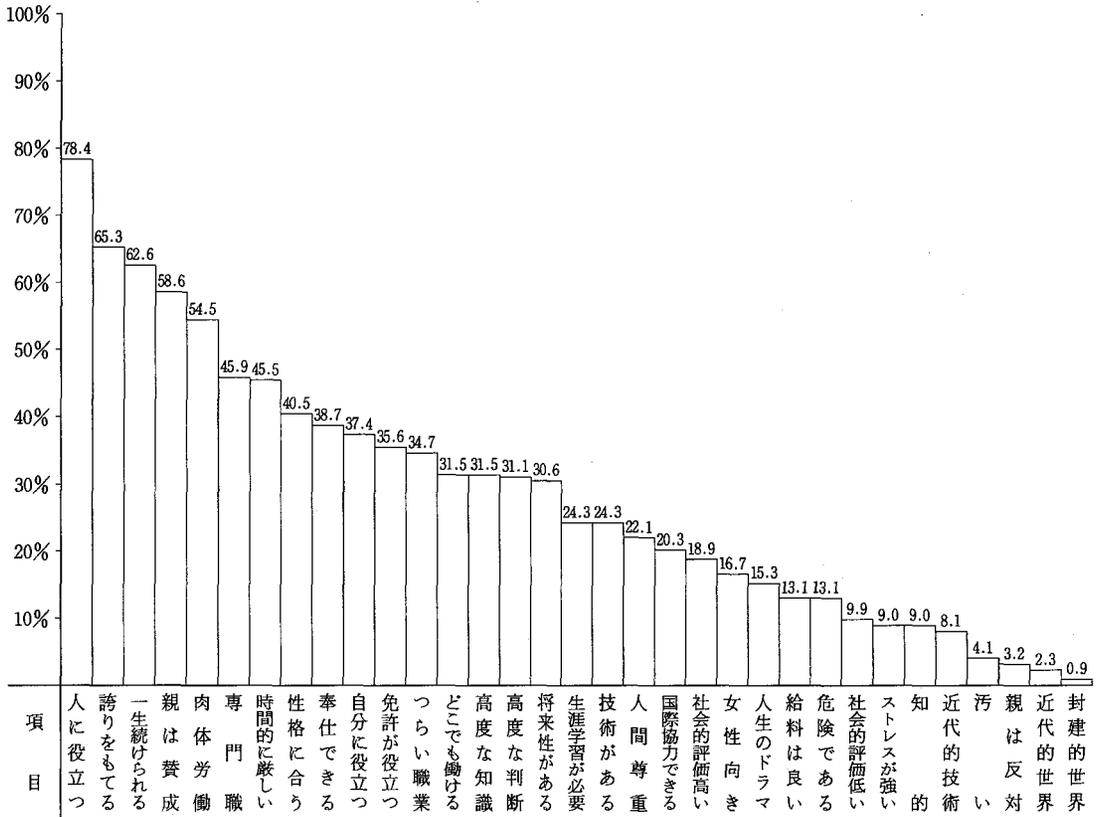


図1 看護課程志望高校生の看護職に対するイメージ

護学科を希望する者(以下、大学群という)53名の3群に分け、看護職のイメージを比較した。

33のイメージ項目のうち、有意差があったのは、図2に示す様に「生涯教育が必要」の項目で、看護・准看学校群に比べ、短大群と大学群が有意に高かった。

また有意差は見られなかったものの、短大群と大学群は、「社会的評価が低い」の項目において、看護・准看学校群の6.1%に比べ、16.4%、13.2%と高い傾向があった。また、看護・准看学校群は、「汚い」において、1.9%の大学群、1.8%の短大群に比べ、8.5%と高い傾向が見られ、同様に「ストレスが強い」、「将来性がある」は低く、「高度な知識」、「一生続けられる」の項目については高い傾向が見られた。短大群は、「給料が良い」において、13.1%の看護・准看学校群、13.2%の大学群に比べ、7.3%と低い傾向が見られ、同様に、「高

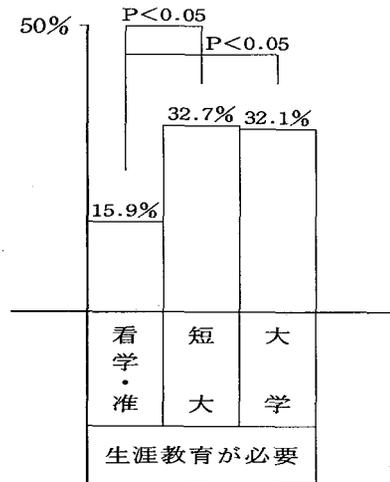


図2 教育機関希望別イメージ

度な判断」、「専門職」は、短大群で高い傾向が見られた。大学群は、「自分に役立つ」の項目におい

て、37.8%の看護・准看学校群、35.4%の短大群に比べ、45.3%と高い傾向があり、同様に、「人生のドラマ」、「親は賛成」は高い傾向にあった。また「親は反対」とするものは皆無であった。「高度な知識」は、看護・准看学校群36.6%、短大群29.1%、大学群22.6%と学歴が高くなる程、低くイメージする傾向があった。

7. 将来希望する看護職種別の看護職に対するイメージ：将来希望する看護職種のうち、看護婦のみを希望する者（以下、看護婦群という）139名、

保健婦のみ希望するか、看護婦と保健婦を希望する者（以下、保健婦群という）27名、助産婦のみ希望するか、看護婦と助産婦を希望する者（以下、助産婦群という）14名を3群に分け、看護職に対するイメージを比較した。

助産婦群は、看護婦群・保健婦群に比べ、図3に示すように「女性に向いている」の項目で有意に高かった。また助産婦群は、保健婦群に比べ、「性格に合う」の項目で有意に高かった。

また有意差は見られなかったものの、保健婦

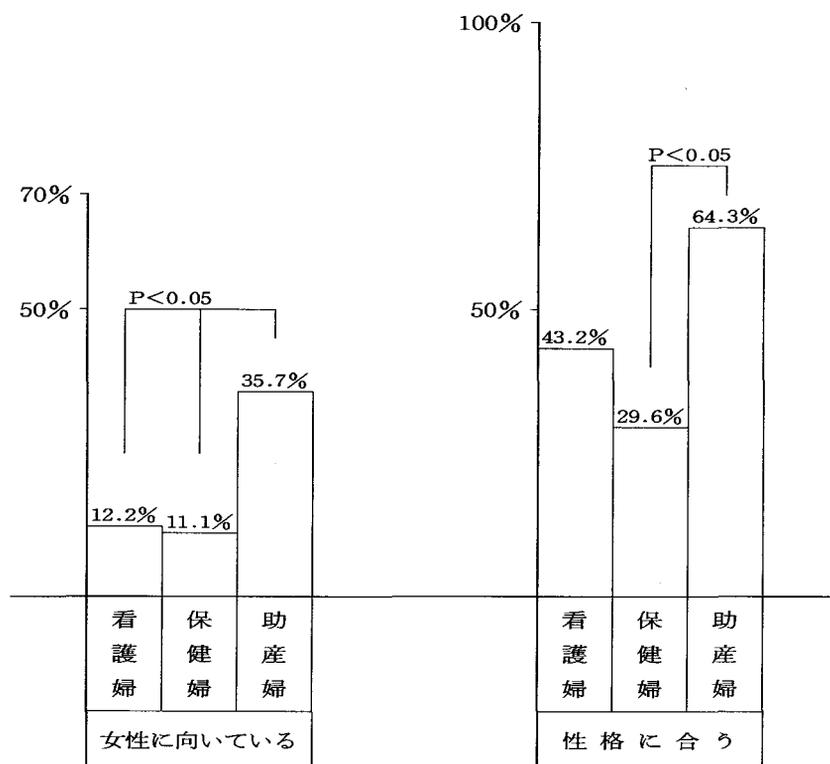


図3 職種希望別イメージ

群・助産婦群は、「どこでも働ける」の項目で、29.5%の看護婦群に比べ、48.1%、50.0%と高い傾向があり、同様に、「生涯教育が必要」の項目でも、高い傾向にあった。また保健婦群は、「親は賛成」の項目で、63.3%の看護婦群、64.3%の助産婦群よりも、74.1%と高い傾向があり、「誇りをもてる」、「人に役立つ」、「高度な判断」、「技術がある」、「知的」の項目では、看護婦群、助産婦群に

比べ低い傾向にあった。助産婦群は、ほとんどのイメージが他の群に比べ比較の高かった。「つらい職業」だけが他の2群に比べ、低い傾向にあった。

考 察

看護課程を志望する高校生は看護職に対して非常に良いイメージを持っており、しかも現実の厳しさを理解した上で、看護職を選択しようとして

いる。また、マスメディアで言われる3Kといったネガティブな認識は低い。これら上位に上がった良いイメージは、看護職の持つ尊さや献身的側面に由来する自負心、資格の持つ現実的利点に由来するものといえる。そして、看護職を専門職と考えるものが約半数いるものの、看護職の専門性を示す高度な知識・判断・技術や、専門職として当然すべき生涯教育（自己研鑽・継続教育）を必要とする仕事であるという位置づけは低い。社会的評価が高いと認識するものが約20%に過ぎないこと、職業に対する社会の評価を表す客観的指標の一つである給料が高いとイメージするものが13%に過ぎないことと考え合わせると、高校生の考える専門職としての看護職とは、歴史的に女性の技術職として位置づけられてきた職業で、ライセンスを持ち、一定の給与と資格が保証されているといった意味を持っており、明確に規定された高度な知識と技術を持った生涯教育を必要とするエキスパートで、社会的にも高く評価された集団であるという考えは強くない。特に短大・大学群は、看護・准看護学校群に比べ、看護職の社会的評価が低いと認識しており、他学部の卒業者が持つであろう高等教育を受けたという自己肯定的な位置づけは低い。

我が国の急速な人口の高齢化によって、今後看護職の需要は益々高まるが、出生率の低下による若年労働力の不足、女性の職業選択の自由によって、看護職の需要を満たすことはより難しくなるものと思われる⁶⁾。それに対して、国としても教育機関の増設や待遇改善、離職防止や再就職の促進などを考えた施策をとっており、それらの施策によって看護職に対する社会的評価が上がる事が期待されている⁸⁾。また、女性の高等教育への進学が増え、男女雇用均等の考えから、種類の専門職に女性が目覚ましく進出している現代社会の潮流の中で、歴史的に女性の職業という性役割としてとらえられたために社会的評価の低い看護職の地位も、看護教育の高等教育化を背景として相対的に向上すると思われる。

看護職の需要を満たすためには、このような看護職の社会的評価の向上を目指す一方、看護課程

への進学を志望する資質の高い高校生の増加を計ることが重要であると考えられる。そのために、最終的な進路決定の時期である高校生において、看護課程の希望の有無を問わず、できるだけ多くの生徒に看護職への期待やイメージを高く持たせることが重要であろう。そしてそれは単に看護職のもつ尊さや献身的性に由来する自負心と現実的有利性だけではなく、看護の高い専門性と看護職の将来的発展性を知ること、また自らが看護学を推進させる原動力になり得る事を理解できる機会を作っていくことが必要である。厚生省健康政策局長の諮問機関である看護制度検討会の出したりポート「21世紀へむけての看護制度のあり方」⁹⁾では、看護職のあるべき姿とは、専門職として誇りうる社会的評価を受けるものであることが第一であり、そのためには専門職としての自己研鑽と、教育体制の改善が必要であると報告されている。専門職とは明確に規定された一連の技能と知識を持った一団で、技能や知識を活用することによってクライアントと一線を画し、技能や知識を根拠として自律を果たしていると定義されている²⁾。また、専門性を高めるための自己研鑽は欠かすことができない。日本の看護教育においても4年制大学化、大学院の設置、専門看護婦制度の導入などなされているが、一方で旧態依然の教育機関も存続したままである。この点に関して、他国の場合、例えばオーストラリアにおいては、看護職者が自分たちの地位と役割を向上させるために積極的に活動した結果、全ての看護職員が大学教育を受けることを可能にしたと報告されている¹⁰⁾。全ての看護職が近い将来において、社会のニーズに答え得る専門性を獲得し、社会の高い評価と承認を得ることができるようにするためには、全体的な看護教育レベルの向上、特に大学教育の充実が図られるべきであろう。また回答者の半数が短大または大学を志望していることから、高学歴志向の高校生のニーズを満たしていく上でも大学化を推し進めていく必要がある。

さらに、看護職に対するイメージは2極に分かれており、人に役立つ、誇りを持てる、一生続けられるとする一方、肉体的・時間的に厳しいとす

るネガティブなイメージも高い。また給料が良いとイメージしたものが少なかったことも、ネガティブなイメージといえる。看護を志望する高校生においては、このネガティブなイメージも自己昇華的に肯定へと方向づけられているが、より広範に良い人材を求める上では、障害として作用するであろう。また、高位に挙げられたネガティブなイメージは、高校生が看護職の労働条件の中でも特に厳しいと感じ、改善を望んでいる項目と考えられる。高度医療化は夜勤の仕事量を増加させ、3交替制による不規則な生活は生活リズムを乱すため、肉体的精神的疲労は大きく、さらに一般人の生活パターンと大きく異なるため、普通の社会生活を営むことを困難にしていると指摘されており⁶⁾、これは看護職が従来から改善を求めてきた事でもある。また看護職の労働に見合った報酬を得ていないことも、看護職の労働条件の厳しいことと合わせて、看護職者の離職の原因になっていることは指摘⁶⁾されてきた通りである。看護職の社会的評価を高めるためには、教育制度の変革を通じた看護職の地位の向上と合わせて、労働条件の改善、特に看護職の人員確保による夜勤回数の減少と夜勤人数の増員、専門性と労働に見合う報酬を確保されることが必要であろう。

次に、短大・大学希望者が看護・准看学校希望者に比べ、生涯教育の必要性を認識していたことは、今後の看護教育の方向性を示唆していると言える。看護学教育の目的は、看護学に基づいて判断し、主体的に創造的に質の良い看護のできる看護婦を養成することであり、そのためには知識学習だけではなく卒業後も絶えず自己学習していく能力を育てること、つまり学び方を学ぶことが重要であると考えられている¹¹⁾。今回の結果は、継続して主体的に学習する能力の素地を既に獲得しているものが、看護教育制度の改革に伴う教育レベルの向上によって、看護職を選択する傾向にあることを示していると思われる。

一方、看護・准看学校希望者は、他群に比べ、「社会的評価が低い」と思っているものが少ない傾向にあり、また「高度な知識」、「一生続けられる」が比較的高いものの、「将来性がある」、「汚い」、

「ストレスが高い」が比較的低い傾向にあった。生涯教育の必要性の理解が、短大・大学希望者に比べ、低いことと考え合わせると、看護・准看学校群は、短大・大学希望者に比べ、看護職のおかれている現在の状況を比較的確定的に受け入れていたため、現状に満足的であり、向上心・生涯教育の必要性を高く認識していないのではないかと思われる。また短大希望者は、生涯教育の必要性を高く認識すると共に、他の群に比べて「専門職」、「高度な判断」が比較的高率で、現時点での看護職の専門性を肯定的に評価していると考えられる。一方大学群は、短大群と比べると、「専門職」、「高度な知識」、「高度な判断」は低く、現時点での看護職の専門性が高いとは評価していない。しかし大学群は、他群と比べて「自分に役立つ」、「人生のドラマ」が比較的高く、生涯教育の必要性を高く認識していることを考え合わせれば、現在の看護職の専門性を一定程度否定的に見ることを通じて、自分が主体的に取り組んでいこうという意欲につながるものをもっているのではないかと思われる。看護の専門性をより高める原動力として期待できる。また、荒川らは、短大看護学生が、短大進学決定時に、4年制大学でないことと一般に看護婦はきつい仕事である事を主たる理由に、保護者や高校教師から反対にあっており、自分の意志で進路決定を行っているが、母親と高校の担任教師の影響も大きいと指摘している⁹⁾。本調査では、大学群が他の2群に比べ「親が賛成」が高い傾向にあり、「親が反対」は皆無であった。4年制大学への志望は、短大、看護学校に比べ、周囲からの反対や干渉を緩和しやすく、4年制化は進路決定に際して周囲の影響も受け易い高校生が看護職をより選択しやすくなるものと思われる。以上の如く、看護教育制度の改革は進学を志望する生徒の考え方の多様化に対応しており、女性の専門的職種への進出という時代背景の中で、さらに推進していく意義は大きいと考える。

また高校生が看護職としての活躍を希望する領域は、病院だけではなく、福祉施設・地域などに広がっていた。種類の看護職に対するイメージも、将来看護婦・助産婦・保健婦の何れを希望するか

によって違いが見られた。助産婦を志す生徒は、看護職が女性として自分の性格に合うと明確にイメージしており、看護職に対するイメージは全体的に良かった。これは助産婦というイメージが出産の場面を通して具体的にとらえられるため、自分の資質と結びつけやすいことによるのであろう。一方保健婦を希望する者は、性格に合うとイメージするものが低く、親は賛成しているが、看護職に対するイメージは他の群に比べ、必ずしも良くはない。これは自分の性格にはそれ程合うものではないが、看護職の安定性や周囲の勧めによって志望するとともに、一定の高学歴志向も満たされていると考えられる。両親をはじめ周囲の者にとっても、看護職のうち夜勤のない保健婦は、比較的勧めやすいのではないかと思われる。また、保健婦に対するイメージが助産婦ほど鮮明でないのは、一般の高校生が保健婦活動にふれる機会は少ないため、地域での地道な活動の多い保健婦業務をより具体的にイメージすることが難しいためと思われる。また、保健婦・助産婦を希望する者は看護職のみを希望するものに比べ、「どこでも働ける」が共に高い傾向にあり、看護職に対して付加的価値を求めているとともに、活動範囲の広さを求めていると思われる。一方看護婦のみ希望する者は、保健婦・助産婦希望者に比べ、「生涯教育が必要」の項目が低い傾向にあった。これは一般的経験やマスメディアを通して得られた看護職に対するイメージが固定化されているためであり、今後はこれら以外の情報源として、例えば高校生一日入学やボランティア活動など、看護実践に触れる機会をもっと提供することが重要であると考えられる。

以上の如く、高校性は、看護職に対するイメージによって志望する教育機関や将来の看護職種への希望が異なる傾向があり、看護教育制度の変革は、看護課程を志望する学生の多様化と一致している。このように広がりのあるイメージを持って入学してくる学生の能力を如何に伸ばしていくことができるかは、受け入れ機関の今後の課題であろう。また、小島¹²⁾や若林、水野、佐野¹³⁾は、世俗的なイメージを持った入学生が、入学後の看護教育を通

して、より現実的なイメージを形成していることを明らかにしている。多様な期待をもって入学してくる学生が、それぞれどのように成長していくのかを追跡していくことも必要であろう。さらに、看護職種が病院内だけではなく、地域や施設でも活躍していることが理解されつつあることは望ましいことであるが、職種によっては高校生にとってイメージの難しいものがあることも認められた。今後は高校生が病院内だけではなく、地域や施設、企業、学校などいろいろな方面で活躍する看護職についても具体的に理解できるよう働きかけていくことが必要であると考えられる。

おわりに

看護課程を志望する高校生は、看護職の現実の厳しさは知りつつも、看護職の尊さや献身性に由来する自負心、社会への貢献度、ライセンスと安定性といった点で、良いイメージを持っている。しかし看護職は専門性が高く、社会的評価を有しているとは認識していない。一方、短大・大学を希望する高校生は看護・准看学校希望者に比べ、看護職は生涯教育が必要だと位置づけるようになってきている。看護職を希望する資質の高い高校生を確保するためには、高校生の看護職に対する期待やイメージを高めることが必要であるが、そのためには看護職が専門職として妥当な社会的評価を受けられるよう、看護職自らの自己研鑽と教育制度の変革、及び労働条件の改善が必要である。四年制大学化はその主要な教育制度改革の一つであると考えられる。また高校生が看護職に対して現実的なイメージを持つことのできる機会を提供すること、医療機関以外での活躍領域の紹介をすすめていくことによって、高校生の看護職に対するイメージは高められると思われる。

文 献

- 1) 亀山美知子：看護婦の社会的評価はなぜ低いのか。看護展望 16：641-643, 1991.
- 2) Maxine Dahl (輪湖史子訳)：ナースのイメージその変革の必要性。インターナショナルナースングレビュー 16：24-29, 1993.
- 3) 水野智, 佐野幸子, 若林満：看護学生の職業イメージ。

- EXPERT NURSE 8 : 30-33, 1992.
- 4) 荒川靖子, 小野ツルコ, 小原ルリ子, 伊東久恵, 喜多嶋康一: 短大看護学科への進路決定に影響する要因の研究. 岡大医短紀要 2 : 97-104, 1991.
 - 5) 厚生省健康政策局看護課(編): 看護教育カリキュラム—21世紀に期待される看護職者のために—. 第一法規, 東京 6-9, 1992.
 - 6) 行天良雄: 岩波ブックレット NO.180 看護婦が足りない. 岩波文庫, 東京. 53-62, 1991.
 - 7) 浅倉新太郎他(編): 日本の保険・医療 5. 労働旬報社, 東京. 76-80, 1991.
 - 8) 厚生統計協会: 厚生指標 国民衛生の動向 1994年. 廣濟堂印刷株式会社, 東京. 195-196, 1994.
 - 9) 厚生省健康政策局総務課(編): 図説日本の医療平成2年度版. ぎょうせい, 東京. 97, 1990.
 - 10) 浅倉新太郎他(編): 日本の保険・医療 5. 労働旬報社, 東京. 104-106, 1991.
 - 11) 波多野梗子: 看護教育を考える. 看護教育25 : 50-51, 1984.
 - 12) 小島禮子: 看護学生の職業意識の形成に関する研究. 看護研究 8 : 46-61, 1975.
 - 13) 若林満, 佐野幸子, 水野智: 看護学生の職業環境の認知. 名古屋大学教育学部紀要 36 : 121-137, 1989.

Images of nurses by senior high school students wishing to go on to the nursing course

Makiko MAEDA, Harumi TAKABATAKE, Masuko KONDO, Takeo OHTA,
Koichi KITAJIMA

Abstract

A questionnaire survey was done by senior high school students wishing to go on to the nursing course in Okayama Prefecture, to know what images of nurses they had, what course for nursing education they wished to best for and what they would like nursing profession to be. Results of analysing data obtained from 222 students were as follows ;

1. They had favorable images of nurses in high rates, although they also recognized the harsh working conditions. Those images were thought to be derived from the preciousness of nursing, devotion to people, and advantage of the license. But recognition of specialty of nursing indicated by items such as knowledge, judgement, skill and continuing education was low.
2. Necessity of continuing education was recognized by students wishing to go on to university or junior college better than students of vocational school of registered and assistant nurses.
3. Images of nurses were different by their choice of profession such as clinical nurses, public health nurses and midwives which they would like to be in the future.

Key words : images of nurses, nursing course, senior high school students, nursing professions

School of Health Sciences Okayama University